

共に創る図書館

～館長対談シリーズ②～

永田研究・国際担当理事との対談

吉本 本日は研究・国際担当の永田理事から、図書館についてお話をお伺いします。よろしくお願いします。まず初めに図書館に対する印象はいかがでしょう。

永田 びっくりしました。私は30年以上徳島大学に勤めていますが、常三島地区の本館は今日初めて来ました。こちらは総合図書館で1階がざわざわしていて雰囲気も違いますし、図書館のあり方が次第に変わってきましたね。



科学を好きになったきっかけ… 私の場合はそれがブルーバックスだった

永田 ブルーバックスや岩波新書、中公新書などもすごく揃っていて、いいと思いました。自分で勉強する、突破するには本を読むのが一番です。私が科学を好きになる上できっかけとなったのは、ブルーバックスでした。細胞の働き方とか分子生物学とか、藤本大三郎先生の本など、覚えているのはブルーバックスのコラーゲンの話です。他にも一般的な知識で血液の話とか、臓器別の本など色々出ていますが、ああいうのを興味深く読んだものです。

そういう点で、今のネット漬けの学生が基本から勉強するためには、図書館に一般書を置いて、読書の環境をつくるのが非常にいいことですね。

吉本 最近、私もブルーバックスの『現代免疫物語 beyond 免疫が挑むがんと難病』、『脳からみた自閉症「障害」と「個性」のあいだ』、『理系のための法律入門 第2版 デキる社会人に不可欠な知識と倫理』などを読みました。専門外でもよく分かります。確かに、蔵本分館にも医療や生物関係のブルーバックスなどの啓蒙書が、もう少しあった方がいいですね。

吉本 理事は教育指導・研究の上で、徳島大学附属図書館での思い出はどのようなことがありますか。

永田 私は蔵本分館を利用していましたので、20年、30年前の話になりますが、Journal of PeriodontologyとかJournal of Periodontal Research, Journal of Dental Research, 分子生物学としてはJournal of Biological Chemistryなどを、抄読会の文献探しも兼ねてなんとなく読みに行っていました。パラパラと見て、興味があるペーパーがあったりすると、そのレファレンスを分館の書庫で探し、文献のコピーを取っていましたが、それらを手にした時は嬉しかったですね。

研究者にとって図書館の役割は、研究資料を集めることでしたので、分館の書庫にも無い場合は、学外文献の申込みをして、他大学図書館からコピーを取寄せてもらっていました。当時は、自分の研究に関連した文献を集めるという作業が今のように簡単でなくて、手元にゲットできるというのが一つの喜びでした。

吉本 PubMedが利用できるようになったのは大きかったですね。これが無い時は、文献検索はかなり苦労しましたね。

何も無いところから、自分で探して何かを求めていく

永田 何も無いところから、自分で探して何かを求めていく、ということは、研究の姿勢でもありますね。実験も同じで、なんでも簡単にパッとやったらパッとできるというものではなく、全てが手作りでしたね。図書館への思いというのはこういうところにありますね。

しかし、ある時からネット化されてPubMedが出てきて、キーワードや名前を入れると論文が出てくるようになり、正直、図書館へ行かなくなりました。だから今日来て、図書館のあり方は変わったんだな、と思いました。図書館は図書館として、人が来る何か仕掛けをして、努力されているということが分かりました。そうしないと生き残れない、図書館の意味がないですよ。



研究・国際担当理事 永田 俊彦
平成 28 年から徳島大学理事
歯学博士

永田 図書館に対する思いとしまして、私の場合、図書館にはにおいがあるといいます。昔のにおいと一緒で、古書というのにはにおいがありますよね。神田の古本屋もそうですし、大したことの無い文庫本を買ってもにおいがあります。紙のにおいって大切だと思いますし、感性としての図書館というのは大切だなと感じています。

研究の場として、図書館は「いい居場所」であること



附属図書館長 吉本 勝彦

吉本 研究・国際担当理事として、まず研究についてお伺いします。研究の場として、教員や院生・学生が図書館に対して必要としているものについて、どのように考えられますか。教育の面では、図書館は自習の場であったり、アクティブ・ラーニングでディスカッションしたりと、色々あります。研究の場という観点ではどうでしょうか。

永田 研究の場として図書館へ来る人達は、卒論や、大学院生だと実験等に関する参考書が必要です。そのように図書館に来なければいけないという中で、図書館がいい雰囲気、いい居場所であること、そういう環境をどうつくっていくかということが、これからの図書館の課題ではないかと思います。

「書く機能」のサポート

吉本 図書館も、研究論文情報等を研究者へ提供するという研究支援の役割がありますが、だんだんと予算的に維持することが難しくなっています。逆に学生に対しては、「書く機能」のサポート、例えば学部学生だとレポートや卒論の書き方、大学院生だと修士論文や英語論文作成支援が、大学の中のどこかでは必要になってきます。

このような支援を行うライティングセンターを、図書館に置いている大学や、図書館以外の所に置いている大学があります。そういう論文を書く側のサポートにおいて、図書館というのは、結構大きなウエイトを占めてくるのではないかと考えます。

永田 そうですね。論文を書くという細かいところまで、大学院生を指導できない場合もあります。蔵本地区では大学院生の単位として英語論文作成法とかありますが、もう少しアドバンスコースとして実践的な、論文を書くためのアクティブ・ラーニングみたいなもので、研究者が自然に身に付けてくれたらありがたいですね。

研究環境としての電子ジャーナル問題

吉本 研究環境を充実するためには電子ジャーナルは必要で、徳島大学でも数社のパッケージを購読していますが、これから予算が増々縮減されてくると維持が困難になります。一方で、徳島大学で研究をやっていくためにはある程度このような学術情報が必要となります。この兼ね合いについてどのように考えられますか。

永田 これは背に腹は代えられない、というのが答えですね。徳島大学では毎年、文科省からの運営費交付金が、1億円ずつ減っています。その中でどのようにやりくりしていくのかというのは、図書館だけでなく全ての学部が考えるべきところです。

昔の話になりますが、必要な論文があった場合、著者に手紙を書いて、郵便で別刷を送ってもらっていた時代もあります。それはすごく人間的で、手紙を通じて著者と少し意見を交わしたり、国際学会で会ったりして共同研究に進んだりすることもあり、非常に良かったです。今でも開発途上国の研究者等から突然、あなたの論文を読みたいので送ってくださいというようなメールが届いたりすることもあります。

だから、仮に電子ジャーナルが減ったとしても、必要な論文を得る何かの打開策はあると思います。

吉本 文献複写取寄せであるILL (Interlibrary Loan) は全世界の図書館間でやっていますね。その他、電子ジャーナル高騰化に対して、論文全文へのアクセス1件に対して何円か支払うなどの受益者負担について検討したことがありますが、これは実施困難と判断しました。大学院生や卒論を書く学生等には、積極的に電子ジャーナルを利用してほしいと思います。

永田 電子ジャーナルの予算措置に関しては、毎年課題となっていますので、29年度についてどうするかというのは、早急にディスカッションして決めていくようになると思います。



研究成果のオープンアクセス

吉本 オープンアクセスについてですが、現在の時勢から公的資金による研究成果の公開は、研究者の理解が得られると思いますが、いかがでしょうか。

永田 もちろん研究者にとって大切なのは、全世界に無料で読んでいただくことができるということです。日本中の各大学の論文がどこかにまとまっていて、それをみんなが自由に引き出せるとすれば、それは将来的に非常に大きな力になると思います。

吉本 これは世界的な動きですね。論文によっては、公開まで1年待たないといけないという制限がある場合もありますが、公開して市民が自由に読めるということが大切です。

電子ジャーナルを購読している大学関係者は気づきにくいのですが、市民は論文全文を無料で見ることができません。PubMed Centralでは論文全文を無料で読むことができます。これは、難病の患者の母親が、治療に役立つ最新情報を知りたいという運動がきっかけとなり実現したものです。オープンアクセスの動向として、米国の国立衛生研究所(NIH)や英国のウェルカム財団は資金提供をしている研究プロジェクトに対し、研究成果として発表した論文を無料公開するよう義務付けています。日本では科学技術振興機構や日本学術振興会の助成を受けた論文についてはオープンアクセス化が推奨されている段階ですが、大学としても税金でサポートされた研究成果に対して社会的透明性を確保し、説明責任を果たすことが必要です。将来的には、科学研究費

などの申請の際にも、過去の論文のオープンアクセス化が問われる時代になると予想されます。ぜひ徳島大学の教員の方もご協力願いたいと思います。

永田 そうですね。自分がアクセプトされた論文は、積極的に、徳島大学の機関リポジトリに入れるようにしようということですよ。

吉本 徳島大学では平成28年1月19日に「徳島大学におけるオープンアクセスに関する方針」を制定しましたが、オープンの仕方は色々あります。例えば自分のホームページで公開するのも一つの方法ですが、その研究者が転職したり退職したりすると、そのホームページが無くなる可能性があります。そういう意味では、機関リポジトリというのは、大学が続く限り半永久的にずっと残りますので、この機関リポジトリを使って公開することを推奨しています。



永田 そういうことを、ご存じない研究者も多いかもしれませんね。

吉本 図書館ではこういう広報を進めたいと考えていますが、例えばURAやIR部門との連携が必要になってくると思います。

永田 大学の研究力というのを客観的に分析する人が必要です。学長が言われています世界の大学ランキングTimes Higher Educationでは、KPI (Key Performance Indicators) 等において、研究力は大学として基本的、重要なところですから、研究戦略を進める上で、URAの役割は重要なものだと思います。今後は大学として研究分野が残っていくためには、一分野だけでは大型研究費の獲得は難しいですので、客観的な評価の下での的確な分析が必要になってきます。

吉本 大学ランキングにおいても、論文の被引用数が出てきます。論文をオープンアクセスにしていると、していない場合に比べて、被引用数が何倍か上がったというデータもあるようです。そのように自分の論文の被引用数を増やすためにも、オープンアクセスは非常に有効だと思います。それから、オープンアクセスという時代から、現在は論文のエビデンスとしての研究データも公開するというオープンサイエンスへという時代に、世界が動き始めています。先日筑波で、G7科学技術大臣会合が開催され、オープンサイエンス推進を確認したという報道がありました。海外での研究データ管理においては図書館を中心に複数部署の連携により実施している大学が多いとのことですので、我が国においても研究データを管理できる人材の育成が必要になってきます。

日本人学生がいかに留学生とコミュニケーションできるか

吉本 国際交流についてですが、理事は以前、留学生センター長及び国際関係担当学長補佐をされていたので詳しいと思いますが、外国人の研究者や留学生等の図書館に対するニーズについて、どのようにお考えでしょうか。例えば資料に関しては、日本人向けの教科書はある程度揃っているが、常三島地区においては、英語の書籍等が不足しているのではないかと、耳にしたことがあります。

永田 外国人はネットに強い人が多いので、それはそれで対応できているのではないかと思います。

今日図書館では、留学生の姿を見かけませんでした。常三島地区は、外国人の留学生は多いので、どういう形にせよ、留学生が入りやすい環境、図書館の端っこにそういうコーナーを作るのではなく、真ん中にどーんと座れるような環境があるといいですね。

国際交流の一つのテーマは、日本人学生がいかに留学生とコミュニケーションするか、ということです。昔は留

学生10万人計画で、ただ受け入れればよいということもありましたが、今はそうではなくて、日本人も学生時代に外国にどれだけ出ていくかという相互交流が大切になっています。したがって、学生に対してもいかにそういう教育ができるかが大切で、そういう環境を作る場所の一つとして、図書館というのは一つの役割があるのではないかと思います。そんな中で、もちろん英語の書籍があればそこで勉強するようになります。

吉本 留学生等と図書館や日本人学生が、何か一緒にできるイベントはないかと思っていますのですが、例えば今までは、トビタテ！留学 JAPAN や、KAKEHASHI プロジェクトの報告会等を行ったことがあります。常三島地区には、地域創生・国際交流会館が本来の場所としてありますが、蔵本地区でもそういう一つの場として蔵本分館が関与できるといいと思います。

永田 大学として国際交流を進めるためには、外国人教員を増やすことが必要です。外国人教員が増えてくると、留学生も教員をよりどころに友好的になります。留学生が堂々と自信を持ち、キャンパスに英語が飛び交い、日本人も留学生と英語で会話するようになれば、本当の意味で大学の国際化と言えるようになります。イベントだけでは難しいですので、このような現場の、下地の部分での国際化が期待されています。

吉本 最後に、図書館職員に望むことをお願いします。

永田 教員をどうやって図書館へ引き寄せるか、みんなが図書館へ行くような環境をどうやって作るかということですね。行かなければならない環境、そういう仕掛けが何かあるといいですね。

その他、学生の中に将来、図書館司書や出版社への就職を希望している人がいたら、知識を活かして支援してあげるといいですね。



吉本 本日はありがとうございました。今後ともよろしくお願いします。

永田 今後、図書館が、研究以外のところで評価されるのも一つの方法かと思いますが、ますますネット化が進む中で、研究関連でどのように生き残るかというのは大きな課題です。今後ともよろしくお願いします。本日はありがとうございました。